

歎異抄

19

文責 本誌編集部



外道の世界

つづいて「魔界・外道も障礙することなし」魔界とは、どんな佛典にも出てきません。この魔の世界が、われわれの悟りを開く道をじゃましたり、誘惑したりするのです。目に見えませんが、目に見えないくせにじゃまをしています。佛教は、涅槃に向かう道を教えています。向涅槃道なのです。それゆえに八正道が説かれたのです。八正道とは、八つの正しい道です。要するにそれは、八つの涅槃に向か

かう道なのです。佛道、佛道といわれるが、それは涅槃への道であり、涅槃とは極楽であり、浄土であります。だから涅槃を説くものは佛教です。涅槃を説かないものは、みな外道といえます。外道とは佛教以外の道ということです。このごろは喧嘩するときの相手を罵倒する言葉に、こん畜生と同じように、この外道といいますが、それではなく、涅槃に向かう道を説かないのを外道ということです。

たとえば、孔孟の教えがあります。この教えは、日本を長く育ててくれたありがたい教えですが、涅槃を説いてい

ないと仮定すれば、やはり広い意味での外道です。このごろでいえば科学の世界とか、あるいはイデオロギーの世界というのが、この外道に当たります。わたしなどは、科学をやっているのが外道です。しかし、わたしは幸いにも科学の端くれをかじりながらも、本願を信じ念佛をもうしています。危うく外道の世界からちょっと向涅槃道に片足を突っ込ましていただいておるのです。片足というより、ズボットと入らせていただいているような気がします。

イデオロギーなどもそうだと思います。イデオロギーも、わが佛尊しで、そうでないのはみな間違いだと激しくやりたてられるわけです。立派な教えかもしれませんが、涅槃に向かつてはいないのです。そういうのは、みな外道なのです。

ところが、イデオロギーが山ほどあっても、それは念佛者の道を妨げられないのです。向涅槃道は無限の道であって、妨げにならないよりか、ある意味では助けになり、ますます向涅槃道が光ってきます。だから本当の人間の救いは、向涅槃道でなければ救われません。いかなるイデオロギーを持ってきても、一つのイデオロギーではだめです。一つのイデオロギーには、かならずアンチイデオロギーがあ

あって、絶え間なくやり合う。お互いに是非を論じていきりありません。科学もそうです。幾ら科学的知識が深まっても、理をきわめ、性をつくすという段取りになると、やはり縁起の思想、縁によって生じ、縁によって滅びるといふ悟りの境地を否定することは、まったくできません。それはニュートンだって、アインシュタインだってできないのです。

ニュートンは、あの万有引力というすばらしい法を発見しました。けれども、科学が進んできたら、その法では間に合わなくなってきました。われわれの目で見える月や太陽の世界、そのなかの現象は、ニュートンの法則で、みん間にあります。しかしその外側の方、いわゆる宇宙のことになると、ちょっと合わないところが出てきた。それを訂正したのが、相対性原理という法を見出したアインシュタインです。ニュートンの法則は、今でも生きている立派な法則ですが、目で見えないところの宇宙の世界は、アインシュタインの法則でないと間に合わない。しかるに、アインシュタインはまだご存命中、この法則は、はや訂正論が出ました。それは量子力学です。それに対し、アインシュタインは、最初は猛烈に反対していましたが、晩年には、

その方が正しいといって、自分の相対性原理を若干訂正したわけです。しかしわたしには、まだ新説が出そうな気がします。しかし、新説が出れば出るほど、一切の現象は縁によって生じ、縁によって滅ぶんだという縁起の思想が光なのです。ニュートンの法則も、アインシュタインの法則も、量子力学も、みんな縁によって生じ、縁によって起るといふことは、一点の疑いもないと思うのです。

光の世界

その縁起の世界があらわれるところのおおもとの場が、真如とか、如来の法性法身とかいうふうな永遠不滅の實在として説かれています。しかし、それは見て知るのではなく、信じて知る、信知することができると受け取らせていただいているのです。ですから、魔界・外道も涅槃の境地をどうすることもできません。この妨げられない世界が涅槃であって、あらゆる現象の起こるそのもう一つ前、あるいは現象が消えていくその世界、それが涅槃の世界、これは永遠不滅であります。しかしわれわれはそれを光の世界として感じています。それは永遠の光、無窮の光、無量光明土であると信じさせていただいているわけです。

ただ、これを理屈で説くとか感ずるとかではだめで、やはりわたしどもは感情の世界で受け取るのです。信心の信とは、ありがたいという喜びに裏づけられているわけです。これはちょっと考えると、すこし次元が低いようにお取りになる方がいられると思います。事実、感情というと、感情に走るとか、感情論とかいって、何か宗教とは縁遠いように、わたしも若いときに思っていました。しかし、金子大榮先生の教えを聞くと、金子先生は純粹感情という言葉でお説きくださいました。感情の純なるもの、それが信心であるとお説きになりました。そののち、いろいろと学ばせてもらうと、やはり哲学でも宗教でも純粹理性とか純粹感情とか説かれています。宗教では純粹理性よりは純粹感情なんです。ですから、信心さえも、これは情において受け取るものだということが、唯識論には書いてあります。信心といっても、喜びを感じないと、ただ、信心という学説を説いたり聞いたりするだけです。ありがたいと、踊躍歓喜の心が起きたときが本当の信心なのです。ゆえに、信心歓喜乃至一念と、もう南無阿彌陀佛一声称えることは、すなわち歓喜、本當にありがたいなというふうに感じます。念佛者は、そういう境地に住んでいるのです。ただ煩惱が

盛んなので、ときにそれを忘れてしまうのです。それは煩惱がじゃまするわけです。けれども本質的にはじゃまになりません。じゃますることは不可能です。やはり真実信心の天は輝き渡る。無量光明土です。そこを感じとって、ありがたいなと思うのです。魔界・外道も障礙することなしというところはこういうふうにも受け取らせていただけだと思います。

懺悔の世界

それから「罪悪も業報を感じることあたはず」。われわれは悪いことをたくさんしてきていますが、それも業報を感じることができなくなる、そういう世界があるのです。それは懺悔の世界です。懺悔の世界は罪悪を感じつつ、しかも罪悪の業報が妨げにならずに、まっしぐらに涅槃の方に向かわせていただけるのです。

懺悔の世界、懺悔の境地は、『教行信証』にもでてきます。ああ、悪うございましたという懺悔の世界です。わたしたちが懺悔といったってチャチなもので、本当は懺悔にならない程度しか懺悔していないわけです。本当の懺悔は手が届かないほど深いのです。浄土宗では「我昔所造諸悪業、

皆由無始貪瞋癡、従身口意之所生、一切我今皆懺悔」という懺悔文をとなえます。それには、わたしは昔々大昔から、もろもろの悪を重ねてきましたが、まず真つ先に懺悔しますとあります。そうすると、どなたも、何もわしはそんな悪いことをした覚えはないと仰せになるでしょう。ところがそれは、浅はかな理屈であります。われわれは、さまざまな罪悪を犯しています。その罪悪を犯したゆえんを考えると、その因縁は、ずっと無限の方から来ているわけです。毎度もうすように、人間の体をいただいたことが、そも

そも永遠のかなたからの因縁のしからしめるところです。あだおろそかで、この人身を受けてはいないので。どこが始めかわからない遠い昔から、ずっと積み重ねられて、ついに今日、人間としての体をいただいているのです。そして煩惱が自然に湧きでて、ろくなことをさせません。たしいが悪いことをしてしまいます。とにかく大昔、どこが始めかわからないところから、もろもろの悪を重ねてきたことを感ぜざるを得ないので。たとえ爪のあかほどであっても、この現世において罪悪を犯したという意識があるならば、そのことは、遙か向こうからの深い深い重々無尽の因縁によって来ていることなのです。

たとえばうそをつくことは罪悪です。それならうそをついたことがないかという、わたしなど、もううそばっかりついでています。そのうそをつくこと一つとついても、いずれが始めかわからないところから、ずっとつづいて来た因縁によつてうそをついているのです。それでわたしは、昔々から悪いことばかり重ねてきました、今日まで重ねておりますと、そう気づくことが懺悔の心なのです。それがみな昔からのむさぼりの心、いかりの心、愚かさ、ねたみ、そねみの心から来ているということです。わたしなぞは、むさぼる心もある、いかり心もある、そねみねたむ心もある。そして、ほかならない自分の体、言葉、心がそうさせたのです。それゆえ、無始この方、ずっと罪を犯しているのです。ですからわたしは、今み佛の前でしっかり懺悔をいたします。それが、この懺悔文です。

ところが、念佛は、その懺悔心の徹底した表白なのです。一方においては、こういう煩惱の世界を離れて、そして淨土へ生まれさせていただきたいという願い心も入っている。しかし同時に、わたしは本当に情けない者でございますということが入っているのが南無阿弥陀佛です。南無阿弥陀佛を称えてこそ、初めて懺悔になるわけです。人に向かっ

て、わたしは悪いことをしたなどという、ちょっときれいなことに聞こえますけれども、じつはそれだけではまだ物足りない。やはり佛に対して一切我今皆懺悔、南無阿弥陀佛というのが懺悔の心です。懺悔の心なくしては南無阿弥陀佛は称えられないとわたしは思います。

したがって、悪業を犯した者が念佛の道に入らせていただく。悪いことをしたことがないという方は、念佛のほうへは入れないのです。悪いことをした覚えがないのですから。そうであれば、何もお願いすることもないので、懺悔することもありません。しかし残念なことには何としても悪いことをしています。機嫌よく泳いでいる魚を一網打尽にして、見る見る料理して食卓に運ぶ。自分が殺すのも悪いが、人様に代わって殺してもらって、結果だけこっちはちょうだいして、うまいうまいといっているのは、もつと悪いといえる。それこそ、もつとも大きな殺生です。こういう暮らしをしていながら、おれは悪いことを一つもした覚えがないというのは、考え方が浅いのであって、よくよく考えて見ると、悪いことをせずには生きておれないというの、われわれの実情ではないかと思えます。